

現代フランス健康事情

たばこ大国のフランス 喫煙者の本音はどこに？

竹内真里・フランス在住ライター

2022年5月27日



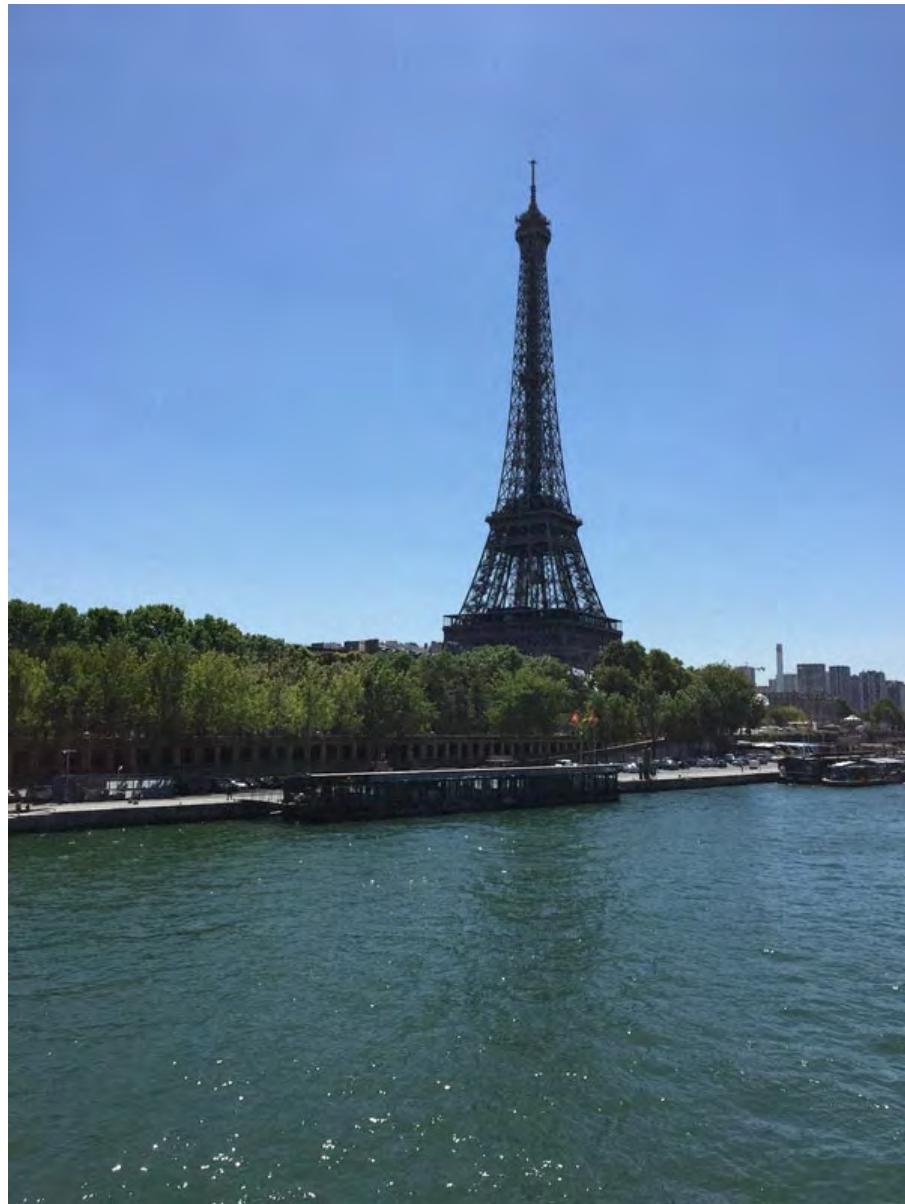
毎年5月31日は、1989年に世界保健機関（WHO）が制定した世界禁煙デーだ。フランスでは今月いっぱい、公衆衛生局を中心に禁煙キャンペーンが行われている。経済協力開発機構（OECD）の2019年のデータで、フランスは毎日喫煙する15歳以上が24%と、先進7カ国中ワースト1位の「たばこ大国」だ。16.7%で4位の日本でも、同日から6月6日まで禁煙週間となっている。今回は、たばこに関するフランス現地の様子や愛煙家の声を交えつつ、喫煙が及ぼすさまざまな問題を考えたい。

改善されない吸い殻のポイ捨て

フランスの街を歩くと、男女問わず、日本より喫煙者が多い印象を抱く。受動喫煙の機会は多い。前を歩いている人の歩きたばこ、メトロの駅のホームでも吸っている人がいる。オフィスの前では、ちょっと一服しに出てきた愛煙家たちが集っておしゃべりしている。

歩道脇や街路樹の植え込み、花壇などにはかなりの量の吸い殻がたまっている。吸い終わると靴でもみ消すこともせず、ポイッと投げ捨てていく。

ちなみに吸い殻のポイ捨ては68ユーロ（日本円で約9165円）の罰金（犬の糞の放置も同様）だが、取り締まりを見かけることはなく、そもそも公共の場の美化や環境のためにポイ捨てをやめようという人が少ない。パリでは市の清掃員がこまめに掃除をしており、たまたま吸い殻は歩道脇に設置された清掃用の水で流され、下水に流れていく。パリの吸い殻量は17年の資料で350トンだそうだ。



花の都パリ、吸い殻のゴミは年間350トン＝筆者撮影

子どもたちが遊ぶ遊具エリアの入り口には、喫煙禁止マークが掲示されている。知ってか知らずか、たばこをふかす大人がいる。ベンチの下には吸い殻が残されている。ベビーカーを押す大人の片手に、たばこがあることもある。ベビーカーに赤ちゃん、横に幼い上の子どもが一緒に歩いていて、確実に受動喫煙をしているが、特に気にしている様子はない。

自宅で窓を開け放していると、隣人のたばこの煙が入ってくる。アパートマン（集合住宅）では、上階からのポイ捨て問題がたびたび起こり、下の階の住民の悩みの種だ。

さて、大都市ではこのような光景が見られるが、07年2月から、法律で医療機関、公共交通機関、教育機関、会社などの公共の場での屋内喫煙は禁止となった。愛煙家のために喫煙スペースが設けられているところもある。飲食店では、店内は禁煙、外の席は喫煙可となっている。

年間7万5000人が喫煙を起因とした病で死亡

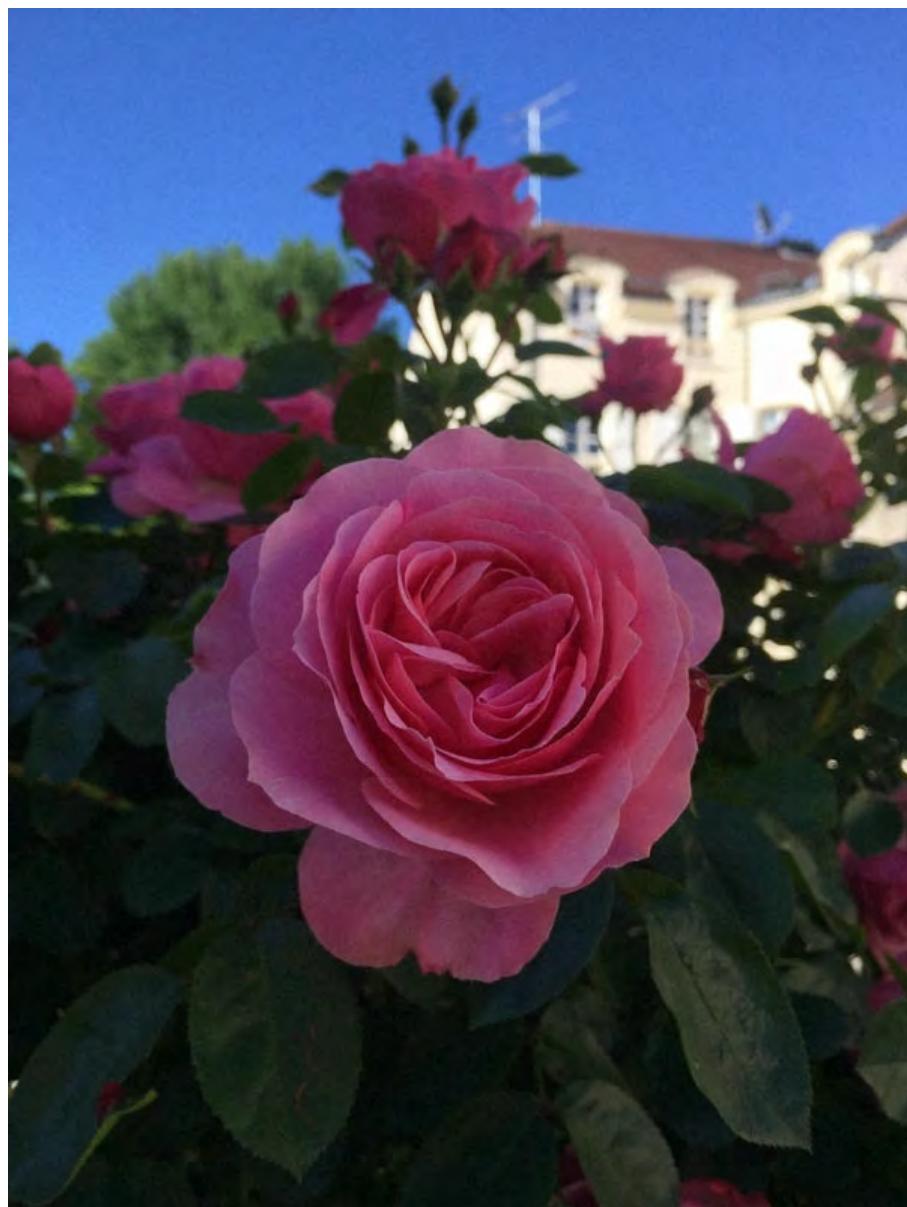
以前、ある女性歌手のインタビューで「21歳でたばこをやめました。習慣的に吸い始めたのは13歳」と話していて驚いたのだが、現実に若い世代の喫煙者もかなり見かける。高校生らが学校の門の前でたむろし喫煙、またはスパスパ吸いながら下校していく。以前住んでいた地区に、幼小中高一貫教育の「有名私立校」があったが、その生徒たちも例外ではなかった。フランスでは、未成年（18歳未満）にたばこやアルコールを販売してはいけない法律があり、表向きは喫煙も飲酒も18歳から、ということになっているようだが、実際はもっと早くから始めているようだ。

家族や親類、知人と集まり、大勢で食事をする機会では、たばこを吸う家族とそうでない家族というように、ほぼ分かれていて興味深い。吸わない家族は誰も吸わない。吸う家族は全員吸う、といった具合だ。

フランス公衆衛生局の20年5月発表の資料によると、年間7万5000人が喫煙を原因とした病で死亡している。喫煙者の数はおよそ1700万人と推定され、約6700万人の総人口の4分の1を占めている。18～75歳の喫煙者たち、時々吸うと回答した人が31.8%、毎日吸うと回答した人は25.5%。フランス薬物・薬物中毒監視センターのアンケート資料では、1日の平均喫煙本数は男性14本、女性11本。ちなみに、たばこ1箱の価格は年々上がっており、現在の価格は1箱約10ユーロ（日本円で約1348円）だ。また、初めて喫煙した年齢は平均で14歳と出ている。

国や自治体はどのような予防対策をしているのか。76年にベイユ法により、テレビやラジオなどメディアのたばこ広告が禁止となり、91年にはエバン法により、公共の場で目に付く看板や広告が禁止された。近年では、健康意識を促進する目的で、17年よりたばこの箱が「喫煙の結果起こりうる健康被害」の画像と警告文が大きく描かれたデザインに変更された。上述のように、年々値上げもしている。

このほか、喫煙の害や禁煙に成功するとどのような効果が得られるか、情報提供専用のテレホンサービスやウェブサイトを開設し、禁煙を支援する専門家がいる医療機関の紹介などを行っている。



5月、6月はフランス各地でバラが楽しめる=筆者撮影

フランス東部のストラスブール市では、18年夏から市内の公園や緑地などを全面禁煙にすることに成功しており、パリや他の都市などでも、一部の緑地や砂浜などを禁煙とするなど、対策を導入している。

愛煙家たちの胸中はいかに

喫煙者の思いもさまざまだ。ここまで見えてくると喫煙大国のイメージだが、たばこをやめたいと思っている喫煙者は増加傾向にあるとのこと。フランス薬物・薬物中毒監視センターの19年の資料では、3分の1の喫煙者が1週間の禁煙を試みたとある。すんなりやめられるか、やめられないか結果はどうであれ、禁煙しようとする人たちも少なくない。

「私にとって、たばこは嗜好（しこう）品と同じととらえています。あなたが毎日飲むコーヒーやお茶と同じといったらわかりますか？ やめようとしてもなかなかやめられないものです。吸いすぎないように気をつけてはいます」（エバさん・30代女性）

「以前は、ヘビースモーカーで、葉巻、紙巻きたばこを吸っていました。父親が肺がんで死んだ10年前から禁煙しようと思いつつ、今は電子たばこです。会社でも休憩時間に一服しないと落ち着かない。僕にとっては喫煙＝リラックスタイムだから、この習慣をなくすことは難しいです。健康のためにやめたほうがいいとわかってはいるのですが」（ジョナタンさん・40代男性）

「毎日1箱吸っていたのを、とりあえず妊娠中は本数を減らす努力を続けました。担当の産婦人科医も、完全に断とうとしてストレスを抱えるより、とにかく量を減らすことを勧めました。娘たちはもう20歳過ぎていますが、彼女たちも中高生ぐらいから日常的に吸っていました。私の両親がともにヘビースモーカーで、私も娘たちも幼い頃から常にたばこがある家庭で育ったので、それが当たり前の生活なんです」（ジェニファーさん・40代女性）

「妻の妊娠をきっかけに、禁煙を決意しました。ニコチンパッチや禁煙ガム、運動をして気を紛らせるなど試しましたが挫折の連続でした。医師

に相談すると、催眠療法士を紹介されました。2週間おきに通い、8回の面談で禁煙に成功しました。自分ひとりでたばこをやめられる人、そうでない人がいます。禁煙したい人は、いろいろなやり方を試して自分に合った方法を見つけてください」（マチアスさん・30代男性）



ゆったりとした時間が流れる初夏のセーヌ川沿い＝筆者撮影

喫煙は、循環器系や呼吸器系などを中心にさまざまな病気の原因になりやすく、特に肺がんや口腔（こうくう）・咽頭（いんとう）がん、喉頭がんなど、発がんリスクを高めることはよく知られている。フランス対がん協会の資料によれば、1本のたばこに4000種以上の化学物質が含まれ、そのうち発がん性物質は50種以上含まれているという。

この時期、喫煙が自身や身の回りの人の健康にどのような影響を及ぼすのか、また、忘れがちだが大気や土壌汚染など、環境に対してはどんな影響があるのか、考えてみよう。

<参考資料>

▽吸い殻が引き起こす環境汚染について

▽経済協力開発機構のデータ

▽ストラスブル市 公園での喫煙禁止 パリジャン紙

特記のない写真はゲッティ

<医療プレミア・トップページはこちら>



竹内真里

フランス在住ライター

1978年千葉県生まれ。2000年から2002年までフランス南部マルセイユに滞在。

その後、東京や香港でライターとして取材・執筆に従事。2015年に再びフランスへ。現在はリヨン市内でフランス人の夫、娘と暮らしながら現地情報を発信している。